

1 研究主題

「生きる力」の核となる豊かな人間性の育成  
 ～「心のノート」を生かした道徳教育を通して～

2 研究の概要

本校では、平成 1 5 年度から道徳教育を研究の中心に位置づけ、心を育てる学校づくりに全教職員で取り組んできた。研究 3 年目となる本年度は重点目標を「家庭や地域における道徳教育との連携強化の促進」と設定した。



これまで、道徳の授業の内容や生徒の感想を学級通信で知らせたり、学校だよりで学校の様子を積極的に家庭や地域に知らせてきた。さらに、学校と家庭や地域が連携して、生徒の道徳性をいっそう育むことができるようにするため、道徳の時間や総合的な学習の時間に、地域の方や保護者をゲストティーチャーとして招いて生徒に直接語りかけてもらう場面を設定したり、保護者に直接的・間接的に道徳の授業へ参加してもらうなどの工夫をしていきたいと考えた。

具体的には、総合的な学習の時間において、地域の方にゲストティーチャーになっていただき地域に出て学習したり、事前学習で講話を行ってもらい、その後、校区内の介護施設で介護体験をさせていただいたり、その他にも様々な体験学習を、それぞれ地域の協力を得て行っている。

これとは別に、全校を 5 つのグループに分けた縦割りの総合的な学習の時間(全 1 0 時間)も設けている。ここでは、琴、三味線、太鼓などの学習に地域の方をゲストティーチャーとして招いて実施している。これら多くの体験学習の直後、または学年が進んだ後で道徳の時間に深化・統合させて生徒の道徳的価値の自覚を一層図り、道徳的意欲や実践力の育成をめざそうと考える。

道徳の時間においても、地域の方にゲストティーチャーになっていただいた。1 年生は読み聞かせの会の方に資料(絵本)の読み聞かせをしていただき、生徒は登場人物に深い共感を持った。2 年生は病院に勤務されている方に話をさせていただいたが、年齢も近く身近な人だけにより一層共感し、働くということについて深く考えることができた。3 年生は社会福祉施設に勤務されている方に話をさせていただき、体験に基づいた話を聞くことで、より自分の身近なこととして考え、自分たちの考えと高齢者の方の思いの違いに気づくことができた。

また、1 年生と 3 年生の保護者には「我が子に宛てた手紙」を書いていただき、授業の中または授業後の学活で活用した。それにより生徒は深い感動と感謝の気持ちを持つことができた。



3 心に響く道徳の授業「ベスト 3」

学 年	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年
主題名	充実した生き方 1 - ( 5 )	異性理解 2 - ( 4 )	家族愛 4 - ( 6 )
ねらい	1 0 0 万回生きたねこの生き方の変容を通して、一度しかない人生をよりよく生きようとする心情を育てる。	主人公の少女に対する気持ちや行動を通して、男女が互いに相手の人格を尊重し、明るく健全な交際を通して向上し合おうとする態度を育てる。	闘病生活を支えた家族の温かさや、やよいさんの思いを知ることにより家族の存在、愛情に気づき、家族への感謝の気持ちを率直に表そうとする心を育てる。
資料名(出典)	「1 0 0 万回生きたねこ」(講談社/佐野洋子)	「雪の日のオルゴール」(学研)	「なんくるないさあ」(主婦と生活社/吉野やよい)
内 容	1 0 0 万回も死んで 1 0 0 万回も生きたねこ。一度も誰をも好きになったことがないねこが、初めて白いねこを好きになり、初めて泣き、そして最後は生き返らない。このねこの生き方の変容を通して、一度しかない人生をよりよく生きようとする考え方ができる。	靴屋で働く少年(主人公)がときどき現れる客の少女に恋をした。初めはほんの軽い気持ちで少女に近づこうとしていたが、オルゴールをプレゼントしたときから真剣なものに変わっていった。少年の気持ちの変容を通して、男女が互いを大切にし、向上し合うことの大切さを考えることができる。	筆者の吉野やよいさんに 1 0 歳の時、小児ガンが発症した。病気との闘いに苦しむ自分の姿を見ているのがつらいだろうと「お母さん、やよい 1 0 歳で生きるのもう十分だよ。」と母をいたわる娘。「なんくるないさあ」と励まし続けた母。告知から退院までの 6 年間、回復を願う家族の心情にふれることができる。